

『万葉集』卷二・一六一番歌「陳雲」についての考察 — 金沢本万葉集の検討 —

森 ほか

一 はじめに

『万葉集』卷二・一六一番歌は、以下の歌である（注¹）。

（一書に曰く、天皇崩ります時に、太上天皇の製らす歌

二首）

向南山陳雲之青雲之星離去月矣離而

当該歌は、崩御された天武天皇を悼む持統天皇御製の挽歌群の中の一首であり、近年の注釈書は、「北山にたなびく雲の青雲の星離れ行き月を離れて」という訓みを採用している。初句「向南山」は、「南を向く山」として、「北山に」と解釈されることが多く、つまり、北山にたなびく青雲が、星から離れ、月からも離れていくという内容が詠まれているとしている。しかし、「向南山」の訓みである「北山に」は、定訓とは言えず、

当該歌は難訓歌として位置づけられ、また、内容的にも、難解な歌として捉えられている。

本稿では、当該歌の中の第二句、「陳雲」に注目する。そして、平安時代の万葉集古写本である金沢本万葉集を再検討し、「陳雲」が「凍雲」とも読み得ることを提起したい。さらに、歌表現としての「凍雲」を、漢籍等から検討することにより、新たな「読み」を試みることを目的とする。

二 金沢本万葉集「陳雲」の表記

当該歌の第二句「陳雲」について、『校本萬葉集』によると、金沢本・類聚古集・古葉略類聚鈔・紀州本・西本願寺本・大矢本・京都大学本・広瀬本・陽明本は「陳雲」とあり、神宮文庫本・寛永版本は「陣雲」とある（注²）。この「陳」と「陣」について、小島憲之は、いずれも相通じた、同義の文字であると指摘して

いる(注3)。また、「陳雲之」は、「タナビククモノ」と訓まれることが多く、「雲が横に長く、広がり漂っている様子」と解釈されている。『漢語辞典』では「陳(陣)雲」は、「浓重厚积形似战阵的云。古人以为战争之兆」(注4)とある。古代の人々は「陳雲」を、戦争の予兆と捉えていたことが理解できる。

平舘英子は、「陳雲」が詠まれる背景について、「陳雲」が戦況を占う雲であり、さらに瑞祥や苦難の要素があったとしたりうえで、次のように述べている。

一六一番歌において、そうした質を有する「陳雲」、すなわち「陣雲」が表記されていることには、題詞に太上天皇と記される持統天皇にとって、壬申の乱における天武天皇の雲の占いを彷彿とさせるものであったのではないかという推測が働く。(中略)持統天皇が、天武天皇挽歌に「陳(陣)雲」を詠む背後には、天文への知識と壬申の乱への想起があったことを示していると考えられる。(注5)

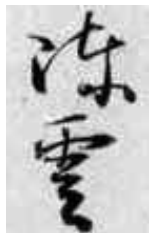
『日本書紀』には、壬申の乱の際、天武天皇が黒雲を占い、戦に勝利すると予見したことで、吉野から挙兵した様子が描かれている(壬申紀)。つまり、戦雲として詠まれる「陳雲」を、壬申の乱で天武天皇が占った黒雲と重ねることで、「陳雲」を天武天皇の象徴としていえると考えられる。

さらに死者の魂が雲によって運ばれる描写は、古代中国の神仙思想にも見られる。『莊子』「天地篇」には「千歳の後、現世を厭えばやがて天に上り、かの白雲に乗じて上帝の在す處に往くならば」(注6)とあり、魂が雲に乗り、天界へと上昇する様子が見える。道教では、死者の魂は、修行を積んだ後に仙人になるとされ、仙人は雲に乗って移動すると考えられている。天武天皇の諡号「天淳中原瀛真人天皇」には道教の神仙思想がみられることから、天武天皇の魂が雲に乗り、「向南山」へとたなびいている、と解釈できるのである。

天武天皇の象徴といえる「陳雲」であるが、しかし、金沢本においては、「凍雲」の表記の可能性を提起したい。金沢本とは、平安時代後期、十二世紀前半書写の伝本であり、藤原定信筆とされる、粘葉装の冊子本である。巻二の大部分と、巻三・四・六の断簡が残存しており、当該歌における最古の写本である。金沢本は、非仙覚本系統の平仮名別提調の形式であるが、当該歌一六一番歌には訓が付されていない。

金沢本には、「陳雲」は以下のように記されている。なお、本稿においては、日本古典文学会「御物金澤本万葉集」に拠るものとする(注7)。また、万葉集校本データベース作成委員会編「万葉集校本データベース」も参照とした(注8)。

図1 金沢本「陳雲」



『校本萬葉集』にも示されているように、従来この文字は「陳雲」と読まれており、この点に関しては、全く問題視されていない。しかし、一字目は、一見しただけでは、「陳」か「凍」かを断定することは困難である。したがって、金沢本内に書かれる阜部の漢字を列挙し、比較していく。

図2 金沢本万葉集巻二阜部漢字一覧



以上、図2は、金沢本巻二に見られる阜部漢字一覧である。特筆すべきは、一画目の運筆である。いずれも、右上に向かって線が伸びている。対して図1「陳」は、一画目が右下に向かう運筆である。さらに、図2の文字はすべて、二画目が明確に判別できるのに対し、図1「陳」は、阜部の二画目が不明瞭である。比較すると、図1「陳」は、ほか阜部漢字とは異質であることが見てとれる。「陳雲」の「陳」のみ、偏を曖昧に書くことは考え難い。

また、彡部漢字については、以下の筆記が見られる。

図3 金沢本万葉集彡部漢字一覧



図1「陳」の一画目と二画目を連続して書くような運筆は、

図3最後の「凝」に近似している。やはり図1「陳」の偏は、二画で書かれる彡部と捉えるのが自然ではないだろうか。したがって、金沢本においては、一六一番歌の「陳雲」は、「凍雲」と表記されている可能性が高い。

なお、図4のように、金沢本巻六・九二三番歌に、「凍」の筆記が確認できる。これは、偏・旁ともに非常に丁寧に記載されており、「凍」であることは明白である。金沢本においては、すべて藤原定信の筆とされているが、図1は漢字が崩されて書かれているため、図4をもつて図1を判断するのは、現段階では困難であろう。

図4 金沢本「凍」



一方、金沢本の本文については、多数の誤写が指摘されているのも事実である。小川靖彦は、金沢本の誤写について、次の

ように述べている。

金沢本における誤写の多発は、平安時代の萬葉集古写本が漢字本文に行書・草書を多く交えて漢字の書としての美を追求するものであったことに起因する。くずした時に字形の近似する文字が多く誤認されている。(中略)もつとも漢字本文の誤写は、「かな」の「訓」の誤写の場合のように空間構成を考慮しての結果というよりは、速度感を重視した運筆によるケアレミスである。^(注)

金沢本の筆者とされる藤原定信は、運筆では全体の流れの美しさや速度感を重視しており、漢字の誤写はその速度感の重視によるものであると考えられる。したがって小川は、「金沢本のみに見える本文については、明らかにそれが正しい場合には依拠すべきであるが、正誤の判断を迷う場合には慎重を期すべきである」と留意を促している。確かに、定信が祖本に「陳(陣)」と書いてあるのを、「凍」と誤写した可能性は否定できない。その場合、定信は、「凍」と書いてあると思ひ、そのまま写した可能性や、「陳(陣)」と書いてあると思つたにもかかわらず、写し間違えた可能性もあるだろう。しかし、『校本萬葉集』では金沢本の表記を「陳」とし、それに全く疑問がもたれていない現状においては、「凍」と書かれている可能性を再検討する

必要があるのではないだろうか。さらに、本節で考察してきたように、卷二の阜部漢字は、「陳雲」の「陳」を除いてすべて偏が明確に書かれていることを踏まえると、金沢本の「陳」は、この部の「凍」である可能性が高いのではないだろうか。

本稿においては、当該歌について、金沢本の表記から抽出しうることに重きを置いている。そこで、金沢本の表記を「凍雲」と考えた場合でも、「読み」が成り立つのかどうか、「陳(陣)雲」との相違も視野に入れつつ、「凍雲」での「読み」の可能性を検討したい。

三 「凍雲」としての「読み」

前節では、一六一番歌「陳雲」が、金沢本において「凍雲」と書かれている可能性を指摘した。「陳雲」には戦雲としての要素、天文遁甲の意味合いも含まれている一方、もし金沢本の表記のように「凍雲」であるならば、どのような「読み」が可能であるだろうか。本節では、金沢本の表記を「凍雲」と考え、誤写の可能性があることには留意しつつ、「凍雲」での「読み」を試みることにする。

「凍」は『説文解字』字注に「凍、欠也。初凝曰欠。欠壯曰凍」

〔注16〕とある。『礼記』『月令』には、「孟冬之月（中略）水始冰、地始凍」〔注17〕とあり、「凍」とは、「ものが冷えて固まる様子」を指す。また、『文字』「上仁」には、「百姓凍寒、宮室衣綺繡」〔注18〕と記されており、「寒気を感じる」意も含んでいることが理解できる。

『漢語辞典』では、「凍雲」は「严冬の阴云」、つまり「厳冬の陰雲」と説明している〔注19〕。「凍雲」が詠まれる歌には、唐の李世民「望雪」に「凍雲宵遍嶺、素雪曉凝花」〔注20〕がある。夜には厳冬の陰雲が山脈を覆い、明け方には至る所に雪片が見られる様子が詠われている。同じく唐の許敬宗「遼左雪中登樓」にも、「凍雲連海色、枯木助風声」〔注21〕と、「凍雲」が海洋のようになく天上を浮かんでいる情景が詠まれている。「凍れる雲」の字の如く、「凍雲」とは、冬季に詠われる語である。

天武天皇は、六八六年九月の薨去後、約二年二か月後の六八八年一月に、大内陵へと埋葬される。当該歌が詠まれた時期として、鳥谷知子は次のように述べている。

埋葬という区切りがつくまでは、死者の魂はたとえ生き返ることはなくてもこの世のどこかにとどまっていると考えるのが一般的であろう。とすれば、一六一番歌は大内陵に遺骸が埋葬された時に南を臨んで作られた可能性も考えら

れよう。〔注16〕

このように、死者の魂が自分のもとから離れるような当該歌における表現は、死者の復活を願う葬礼儀式である殯の最中よりは、殯後の埋葬時であると考えるほうが妥当といえる。

陰暦の一月は、現在のの二月頃にあたるため、まさしく厳冬である。時期としては、「凍雲」が詠まれることはあり得るだろう。さらに、古代中国では一月（仲冬）は、陰陽のあらたな生成と調和を慎重に持つべき画期の月といわれていたとされ〔注22〕、道教で非常に重要とされる「冬至」の月でもある。つまり、当該歌が大内陵埋葬時の六八八年一月一日〔注18〕に詠われたものであれば、「凍雲」と詠われた可能性も十分に指摘できるのである。

陰雲とは「暗く曇った天気の雲、沈鬱で不快な色の雲」〔注19〕である。すなわち黒雲である。時代は下るのであるが、明の何轉書「元夕夢鳳城何旦符」には、「朔气冻云黑」〔注20〕と詠われており、「凍雲」が黒色であることが読み取れる。黒雲といえは、天武天皇が壬申の乱で戦況を占った雲と結びつく。壬申の乱で天武天皇を勝利に導く契機となったものこそ、まさに黒雲であり、天武天皇を象徴づけるものとしては極めて重要な要素である。

つまり、「陳雲」が担っていた天武天皇の象徴的要素は、「凍雲」にも同様に確認できる。さらに「凍雲」が、天武天皇を象徴する論拠として、天武天皇と「雪」との関連についても挙げておきたい。

次に示すのは、集中における天武天皇の御製歌の一部である。

み吉野の 耳我の嶺に 時なくそ 雪は降りける 間なく
そ 雨は降りける その雪の 時なきがごと その雨の
間なきがごと 隈も落ちず 思ひつつぞ来る その山道を
(1・二五)

我が里に 大雪降りり 大原の 古りにし里に 降らまく
は後 (2・一〇三)
我が岡の 竜神に言ひて 降らしめし 雪の掛けし そこ
に散りけむ (2・二〇四)

天武御製歌は「雪」を詠じた作品が多く、それらは漢籍の影響が指摘されている。二五番歌は、魏の武帝「苦寒行」(『文選』卷二七)の「蹊谷少人民 雪落何霏霏」や、『詩経』邶風「北風」の「北風其喑、雨雪其霏」が典拠として挙げられている(註2)。

また、一〇三番歌「大雪」の語について、『詩経』大雅「信南山」の「上天同雲 雨雪雰雰」の毛伝に「雰雰雪貌、豊年之冬必有積雪」とあり、「雪を豊年の瑞祥とする中国思想を踏まえているのだろう」と考えられている(註22)。

天武天皇が出家し、吉野へと入ったのが、六七一年の十月である。その約半年後に壬申の乱が勃発することとなるが、渡辺護は二五番歌について、次のように述べている。

天智紀十年の天武の関連記事がその冒頭に「冬十月」と明示しているのは、この歌にとつて重要であろう。その季節の意識がある限り、冬の吉野へと向う天武を包む雪と雨は、序詞の一部という制約を越えて、冷えびえと実感されることとなる。(中略)「み吉野」そして「冬十月」の雪、天武御製歌においてそれらは深い史的意味をもって受け取られ、たに違いない。(註23)

さらに、「天武の雪歌に瑞兆の要素があるとすれば、それは時代の勝利者であった一代の英雄、天武天皇自身がそれを生んだともいえる」と述べている(註24)。

この渡辺の論を受け、竹嶋麻衣は、「渡辺は、雪を『天武天皇を象徴するもの』と捉えている」とし、「天武朝象徴の雪」として、次のように述べている。

天武天皇が雪を詠じる時、それは一方では壬申の乱の「苦難の雪」を、一方では乱後の「喜びの雪」を意味する。時代を経て、歌を享受した者たちは、吉野の雪と飛鳥の雪を重ねて、「雪」というものに天武天皇の生き様が集約されていると感じたのであろう。^(注25)

以上、これらの考察を踏まえて一六一番歌を捉えようと、冬という季節を意識させ、天武天皇の象徴ともいえる「雪」を連想させる「凍雲」が、「向南山」へと向かう情景が詠われている、と解釈できよう。寒さの厳しい冬の十月、雨雪が絶え間なく降り続ける中、思いを抱きながら吉野への道を辿った天武天皇は、その半年後に吉野で旗揚げをし、壬申の乱にて勝利を収める。つまり、「吉野へ隠遁する際の苦難の雪」が、後の「英雄としての天武天皇」や「天武朝の治世」を形成する基盤にあつたと、受容されることが重要なのであろう。苦難を乗り越え、時代の勝利者となった天武天皇の雄姿が「雪」に象徴されることで、その「雪」を想起させる「凍雲」は、一六一番歌における「読み」としても、成立し得るのである。

なお、「凍雲」と「雪」の関連については、以下の通り、漢籍に複数の用例が確認できる。^(注26)

李世民「望雪」

凍雲宵遍嶺、素雪曉凝華。入牖千重碎、迎風一半斜。
不妝空散粉、無樹獨飄花。縈空慚夕照、破彩謝晨霞。

白居易「夜招晦叔」

庭草留霜池結冰、黃昏鐘絕凍雲凝。
碧氈帳上正飄雪、紅火爐前初炷燈。
高調秦箏一兩弄、小花蠻榼二三升。
為君更奏湘神曲、夜就儂來能不能。

曹唐「小遊仙詩九十八首六五」

水滿桑田白日沈、凍雲乾霰溼重陰。
遼東歸客問相過、因話堯年雪更深。

では、このような「凍雲」ならば、持統天皇はそこにどのような思いを込めたか、「読む」ことができるだろうか。漢籍における挽歌との関連を確認し、考察を進める。

次に示すのは、唐の宋之問「梁宣王挽詞三首」の第三首である。^(注27)

貴藩堯母族、外戚漢家親。業重興王際、功高復辟辰。
愛賢唯報國、樂善不防身。今日衣冠送、空傷置體人。

金精何日閉、玉匣此時開。東望連吾子、南瞻近帝臺。
地形龜食報、墳土燕銜來。可歎虞歌夕、紛紛騎吹回。

像設千年在、平生萬事違。綵旌翻葆吹、主嬰奠靈衣。
壘日寒無影、郊雲凍不飛。君王留此地、駟馬欲何歸。

引用した第三首は、梁宣王である武三思の埋葬場面が詠われており、死者への離れ難さや悲しみが表現されている。当挽詞の典拠としては、駱賓王「樂大夫挽詞五首」の「返照寒無影、窮泉凍不流。居然同物化、何處欲藏舟」が挙げられる（注28）。中でも特記したいのは、「雲凍」の表記である。一六一番歌の「陳雲」を「凍雲」と考えると、その表現に類似がみられる。挽歌において、こうした「雲凍（凍雲）」の表現が共通して見られることは、検討されるべきである。つまり、一六一番歌において、雲が凍るほどの寒さは、天武天皇を喪った哀惜や孤独感を強調させよう。さらに、凍てついたように動かない雲を詠うことで、自分の許から雲が行ってほしくない、留まっていほしい

いという、持統天皇の痛切な心境を窺わせる。先述したように、「凍雲」を天武天皇の象徴であると捉えると、「凍雲」は、単に「雪を含む雲」としてのみでなく、「雲の滞留を願う語」としても、作意が含有されていると考えられる。そう考えると、約二年二か月の天武天皇の殯宮期間の長さも容易に意識されるだろう。「凍雲」の語により、持統天皇の、天武天皇との離愁が認識させられるのである。

一六一番歌では、その後は「青雲之星離去 月牟離而」と続く。雲が留まっていほしいという願いとは反対に、雲は星や月からも離れ、遠ざかっていく様子が詠われている。「星離去 月牟離而」と、「離」を繰り返して詠歌することで、持統天皇の願いと現実の差異が切々と実感される。「凍雲」、すなわち天武天皇の魂は、星や月からも離れて、「向南山」へと向かって行くのである（注29）。

四 おわりに

以上、「陳雲」を「凍雲」と捉える考察を行った。主に二つの視点から論拠を挙げ、その可能性を考察した。

一点は、写本の筆跡である。万葉集巻二最古の写本とされて

いる金沢本には、「凍雲」と書かれている可能性を指摘できた点は大い。確かに、誤写も複数確認されている写本ではあるが、同巻の同部首漢字と比較しても、一六一番歌「陳」の筆記は明らかに他と異なっており、「凍雲」の表記である可能性は再検討されなければならない。

もう一点は、「凍雲」がもたらす歌意である。これまで解釈されてきた「陳雲」は、漢籍では「戦場の雲」としての意味合いが強く、その心象は、古代日本にも伝来していると考えられる。しかし、平舘英子が「中国における『陳（陣）雲』の表現には複数の雲が連なったり行く様子は見えなかった」^(注30)と述べるように、「雲が連なったりたなびいたりする」といった意味で、「陳（陣）雲」が用いられることには、再考の余地がある。

一方で「凍雲」は、道教及び陰陽思想で重要な一月を象徴し、当該歌が天武天皇埋葬時に詠われたことを示唆している。また、陰雲である「凍雲」を詠うことで、視覚的イメージとして、壬申の乱の黒雲を想起し得るのである。

さらに、天武天皇と「雪」には、双方に、史的に深い関連が見られることを確認した。「雪」に天武天皇の影を見出すことで、その「雪」を含む雲である「凍雲」にも、天武天皇を想起し、偲ぶことは容易であろう。そして、漢籍における挽歌の表現を

踏まえることで、「凍雲」には、雲の滞留を願うといった、天武天皇との別離を惜しむ持統天皇の悲哀な心情も見出された。凍てついたように動かない雲、と詠うも、実際には雲は星から離れ、月からも離れていくのである。あえて「離」の文字を重ねて表記することで、持統天皇の願いと別離という現実の差異が痛切に強調される。

以上により、一六一番歌における「陳雲」は、金沢本においては「凍雲」と表記されている可能性があり、誤写の可能性は否定できないが、「凍雲」の場合でも十分に「読み」が可能であることを提起する。

注1 本稿における『万葉集』の引用は、小島憲之・木下正俊・

東野治之校注訳『新編日本古典文学全集 萬葉集①』（小学館・一九九四年）に拠る。

- 2 佐佐木信綱等編『校本萬葉集 新增補版』巻第一・巻第二（岩波書店・一九七九年）、佐竹昭広等編『校本萬葉集 新增補版』巻第十一（岩波書店・一九八〇年）、廣瀬捨三等編『校本萬葉集 新增補版』別冊一（岩波書店・一九九四年）、「万葉集校本データベース」https://www.manyou.gr.jp/SMAN_1/参照。

- 3 小島憲之「萬葉集と中國文學との交流」(『上代文學と中國文學 中―出典論を中心とする比較文學的考察―』塙書房・一九六四年)
- 4 漢語辭典「陣云」
<https://cdhwnet.com/view/hdggoghgbeadjkco.html> (閲覧日二〇二二年五月二三日)
- 5 平館英子『青雲』考―空間を認識するという視点から―(『萬葉』第二二九号・萬葉学会・二〇二〇年三月)
- 6 吉田義成訳『莊子 現代語訳』(支那哲学叢書刊行会・一九二六年)
- 7 日本古典文学会『御物金澤本万葉集』(日本古典文学刊行会・一九七三年)
- 8 万葉集校本データベース作成委員会編「万葉集校本データベース」https://www.manyou.gr.jp/SMAN_1/
- 9 小川靖彦「書物」としての萬葉集古写本―新しい本文研究に向けて(『継色紙』・金沢本萬葉集を通じて)―(『萬葉語文研究』第七集・和泉書院・二〇一一年)
- 10 漢典「凍」<https://www.zdic.net/hans/%E5%87%8D> (閲覧日二〇二二年六月二五日)
- 11 竹内照夫『新釈漢文大系』二七―二九卷「礼記」(明治書院・一九七一年)
- 12 南溟校『文字』「上仁」(須原屋伊八・二七五七年)
- 13 漢語辭典「凍雲」
<https://cdhwnet.com/view/ooiemamcdhkhkhhk.html> (閲覧日二〇二二年五月二三日)
- 14 清・聖祖御定『全唐詩』(同文書局・一八八七年)
- 15 古詩集「許敬宗」
https://www.gushiji.cc/shangxi/325251_2.html (閲覧日二〇二二年五月一四日)
- 16 鳥谷知子「持統天皇の天武天皇挽歌―第一六〇・一六一番歌の背景―」(『学苑』第八〇七号・昭和女子大学近代文化研究所・二〇〇八年一月)
- 17 新川登亀男「道教をめぐる攻防」(大修館書店・一九九九年)
- 18 小島憲之・直木孝次郎・西宮一民・藏中進・毛利正守校注訳『新編日本古典文学全集 日本書紀③』(小学館・一九九八年)
- 19 注13に同じ
- 20 古詩文網「何轉書『元夕夢風城何且符』」
https://so.gushiwcn.cn/shiwenv_287428fc7565.aspx

(閲覽日二〇二二年六月三〇日)

- 21 坂本信幸「天武天皇の御製歌」(『セミナー万葉の歌人と作品』第一巻・和泉書院・一九九九年)
- 22 注21に同じ
- 23 渡辺護「雪歌の一系譜―天武の雪と人麻呂の雪―」(『美夫君志』第四五号・美夫君志会・一九九二年一月)
- 24 注23に同じ
- 25 竹嶋麻衣「雪をめぐる相聞―天武天皇と藤原夫人の贈答歌の位置付け―」(『熊本県立大学大学院文学研究科論集』第一号・熊本県立大学大学院文学研究科・二〇〇八年九月)
- 26 注14に同じ
- 27 注14に同じ
- 28 注14に同じ
- 29 「向南山」は、「キタヤマ」「カムナミヤマ」「カムヤマ」等の訓みがあり、未だ定訓はないが、「南山」が吉野山を指すことに留意する必要がある。
- 天武天皇と吉野との関連は、周知の通りであるが、『古事記』の序文には、大海人皇子(天武天皇)の吉野入りについて、「南の山に蟬のこくとく蛻けましき」(『新編日本古典文学全集 古事記』小学館・一九九七年)とあり、「南の

山」と記されることは重要である。漢籍における「南山」は、道教や神仙思想において重要な場所であり、不老不死の地や仙人の棲とされている。一方、吉野については、『懐風藻』に紀朝臣男人の作った「扈從吉野宮」の詩があり(七三)、吉野と神仙思想が結びつく内容であるとともに、吉野山は「南岳」と記されている。つまり、吉野は日本の「南山」として捉えられていたといえる。

また、金沢本には「雲向南山」と表記されており、最初の「雲」の文字は誤写とも捉えられるが、「雲が南山に向かう様子」が記されているとも理解できる。この場合の「向」は、山の向きを示しているのではなく、雲の動きが向かう先は南山であるという「方向介詞」として作用していると考えられる。

30 注5に同じ

(もり ほか／本学学部四年生)

キーワード＝金沢本万葉集・天武天皇挽歌・陳雲